



思ひだすこと

壽岳文章

日本各地を歩いてみると、農閑期を村民が遊藝の出稼ぎにゆく習慣のある村に時折でくはず。私の郷里播磨にも田舎廻りの歌舞伎ごとをして名を賣つた村落があつた。そのためか播磨の村々には芝居への關心が強いやうに思ふ。十一の時から私の大きくなつた東播の村などには粗末ながらに定小屋があつて、一年に一度か二度は必ず播州役者の大一座(?)がかかつた。舊劇ござれ、新派劇ござれ、何でもやる。その荒削りな演技をすでに何十回か見たであらう芝居すきな老婆たちは、臺所仕事や針仕事をやりながら、恰も今の娘が流行歌を口ずさむやうにさはりを口ずさんでゐたし、男たちは屢々義太夫の溫習

會をやつた。桶屋のおやぢが桶を作つてゐるのを見た記憶はないのに、彼が村唯一の三味線方であつたことと、夏には村唯一の西瓜造りであつたこと(私は三味線と西瓜とにどんな因果關係があるか知らぬ)を、私は今なほはつきり思ひ出す。淡路からはよく人形芝居が來た。しかし數名が組んで來ることは稀で、多くは一人で箱に入れた人形を擔つてきて、三味線なしに語りながら簡單な所作をして見せ、あちらこちらの家で五錢か十錢の金を貰つてはカチリと人形を大型の提灯箱のやうな箱へ入れて出かけてゆく。何をやつても最後には奴の首をパチリと二つに割つてみせて子供を笑はせる。血を想はせるあの氣味のわるい肉の色は、それをきのふ見たかのやうに私の腦裡に鮮かだ。

かうした環境に育つたためか、十二三歳の少年の私が「西南餘聞不思議之彈丸雲間明月因果廻三人片輪」と題する脚本(?)を作つてゐるのを、その頃の手すさびの雜記帳に見つけて呆れもし微笑みもする。幸にして座付の作者にはならずすんだが、争はれぬもので今もなほ芝居すきなには、感受性の



鋭い少年期がすごされたこの環境のこの物すごい薫陶も多少は責任をもつべきかとも思ふ。播磨の北海道と言はれるほど邊鄙な山村の自然を、ただひとり身にしてみるやうに愛した少年の私は、同時にまた、二二三の仲間を語らひ、厚紙で鎧や兜を作り、土藏の中から赤さびた鎗や刀をひそかにもち出して、地藏堂の「大江山鬼退治」や「箴の梅」の繪馬を背景に村芝居で印象の鮮やかな一谷嫩軍記の眞似事などをする少年でもあつた。あの地藏堂の裏の壁の隙間を採せば、柄を短くした槍が出てくるかも知れない。ひそかにもち出した上に、ふりまはしてかねて短くしたあとのたたりが恐ろしく、もとの土藏へはもちかへらずにそのまま奉納してしまつたのである。

昭和十六年の春であつたか、大阪の英國領事で、私たちと親しくゆききしてゐたジョン・ビルチャア君をさそつて、私共夫婦で文樂を見たのも忘れられぬ思ひ出である。出しものの一つに鮎屋があつたが、おさとのしぐさが面白いとて、ビルチャア君はそれからのちよくおさとの眞似をし、私たちはそれをたしなめた。英國エリザ朝劇のある場面に彷彿た

るものがあると彼は語つたが、それはさもあらう。人事不測、ビルチャア君からは最近なつかしい消息を得たが、あの時私たちのために座席から食事から一切の世話をしてくれた鴻池君すでに無く、樂屋でいろいろと人形の説明をしてくれた榮三老もぬい。

京都に隱棲されてからの河上肇博士が私に借覽を言ひよこされた書物のなかに、三宅さんの文樂の研究正續二冊がある。先生も晩年は文樂や歌舞伎に並ならぬ愛著を寄せられてゐたやうだ。それは先生にしてみれば「力にあまるおもに負ひ、山こえ野こえ川こえて、夢路の塵にそまりたる、五十餘年の旅ごろも」を、つひのやどりにぬぎすててかへられたところのふるさと「詩のうましくに」の一風景であつたらう。どんなに烈しいイデオロギイをもち、どんなに險難な道を歩んだ日本人でも、藝術的な嗜好をもつ日本人である限り、かうした昔ながらの藝能にはノスタルヂアを覺えると言ふのが、正直のところではあるまいか。老いてそれに心ひかれた博士の姿を私はよく臉にえがく。

(關西學院教授)